

日语语音学

RIYU YUYINXUE

蔡全胜/编著

 大连出版社
DALIAN PUBLISHING HOUSE

日语语音学

日本文学・言語学・文化研究

——

2024年

日语语音学

(日本語音声学)

蔡全胜 编著

大连出版社

© 蔡全胜 2007

图书在版编目(CIP)数据

日语语音学 / 蔡全胜编著. —大连:大连出版社, 2007. 7
ISBN 978-7-80684-556-1

I. 日… —II. 蔡… III. 日语—语音 IV. H361

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 117061 号

责任编辑:孙德彦

封面设计:林 洋

责任校对:于孝锋

出版发行者:大连出版社

地址:大连市西岗区长白街 10 号

邮编:116011

电话:0411-83627375 0411-83621147

传真:0411-83610391

<http://www.dl-press.com>

E-mail: cbs@dl.gov.cn

印 刷 者:沈阳全成广告印务有限公司

经 销 者:各地新华书店

幅面尺寸:140 mm × 203 mm

印 张:10 75

字 数:240 千字

出版时间:2007 年 10 月第 1 版

印刷时间:2007 年 10 月第 1 次印刷

印 数:1 ~ 5000 册

书 号:ISBN 978-7-80684-556-1

定 价:18.00 元

前 言

随着我国日语教育事业的发展,人们对日语语言的研究已不再局限于词汇、语法,对日语语音的研究也悄然兴起。虽然广大日语学习者对语音学已经不再“敬而远之”,可目前市面上能为同学们提供的有关书籍似乎不多。尤其,适合于中国学习者使用的日文撰写的书籍可谓少见。为此,作为丰富此项学习与研究的一块砖,期盼能为我国日语教育事业这座宏伟大厦的建设做出一点儿贡献。

此书是在多年教学实践的基础之上,汲取国内外日语语音研究的精华,结合我国日语学习者的特点,参照多部有关论著,经过反复推敲修改,尤其原稿经过在大连外国语学院日语硕士研究生课程一年实际使用;听取广大同学们的意见,不断完善后最终定稿。相信此书对准备考研的本科生学习、了解乃至掌握日语语言基础和理论有所帮助;对攻读日语语言学的本科生和硕士生专项研究日语语音学提供一个平台,为今后更深入的研究打下基础。

此书的特点是知识准确,内容丰富,编写新颖,讲解通俗。在编写过程中注意到日语语音学研究方面各家学说有所不同,考虑到我国日语学习者的学习目的及特点,选用公认的基本学术观点,知识不偏颇,确保考研准确性和通用性。在内容方面,除了通常语

音学常设的章节外,还增加了日语音韵历史演变的内容,使日语语音学的研究有根可循,脉络清晰,更加丰富。编写方法方面,考虑到学习日语语音学的难度,在每章节之后都附加了“演练”,在日语声调章节中还增设了一定量的“练习”项目,这将有助于消化理解各章内容。在讲解方面,重点部分适当标注,发音部分配有图表,使讲解简明扼要,通俗易懂。

本书在编写过程中得到同行多方指导和帮助,大连出版社为此书的出版给予了大力支持,在此一并表示感谢。

但是,由于本人的学识所限,错谬、疏漏之处在所难免,诚望得到各位专家、同行和使用者的指正。

编 者

2007 年 7 月

目 次

第1章 音声学

第1節 音声学の定義	1
第2節 音声	3
第3節 音声器官	4
第4節 言語音を作る仕組み	6
第5節 音声記号	11

第2章 母音の分類

第1節 音質	14
第2節 基本母音	16

第3章 子音の分類

第1節 調音点・調音法	21
第2節 鼻音子音	24
第3節 破裂音	30
第4節 摩擦音	35
第5節 破擦音	43
第6節 弾き音	46
第7節 震え音	47
第8節 側面音	48
第9節 接近音	50

第4章 音声と音韻

第1節 音素	53
第2節 日本語の音素	57

第5章 日本語の音節と拍

第1節 音節	60
第2節 拍〔モーラ〕	66

第6章 五十音図とその発音	
第1節 (硬)口蓋化	71
第2節 中舌母音化	74
第3節 五十音図の発音	75
第7章 特殊音素	
第1節 撥音	106
第2節 促音	111
第3節 引く音	114
第8章 音声変化	
第1節 無声化	120
第2節 鼻濁音(カ行鼻音)	123
第3節 母音の連続	126
第4節 拗音の直音化	128
第5節 長母音の短母音化	129
第9章 アクセント	
第1節 アクセント	135
第2節 日本語のアクセント	144
第10章 日本語の韻律	
第1節 イントネーション	250
第2節 プロミネンス	268
第3節 ポーズ	275
第4節 テンポ(速さ)	278
第11章 日本語の音韻変化	
第1節 歴史に見る音韻	283
第2節 現在の発音に至るまで	312
第3節 江戸語から共通語への変化	318
参考文献	331

第 1 章 音声学

第 1 節 音声学の定義

音声学とはコミュニケーションをするために人間が音声器官を使って出す音である「言語音」、すなわち「音声」の研究をする学問である。人間は日常の社会生活の中でさまざまな形でコミュニケーションを行っている。たとえば、ドアを叩くという動作は、部屋の外からなら「入ってもいいか」という意味を表し、トイレなら外からは「入っているか」、中からは「入っているぞ」という意味を表す。また、叩き方によっては「早く開けろ」「早く出ろ」ということにもなる。ボクシングの試合でタオルが投げ込まれれば、それは「これ以上続けると危険だから、ただちにやめろ」ということになる。しかし、何といても一番効率がよく、複雑な内容のことも伝えられ、日常最もよく用いられているコミュニケーションの手段は言葉、それも話し言葉(speech)である。人間は「何かを伝えたい」と思ったとき、その伝え方の手段を選ばなければならない。もし、その手段が言葉によるものであったら、自分の頭に浮かんだ伝えたいことを表すために、語を選び、それを適当な順序に並べる、などするわけである。そして、話し言葉であれば、筋肉を使って空気に振動を与え、音声を

発する。すると、その音声が空気中を伝わって相手の耳に達する。鼓膜で受け止めたその空気の振動は電氣的信号となって神経を通して脳に達し、聞き手はそれを概念に置き換えて言葉として理解する。

このような話し言葉というコミュニケーションの過程から、音声の研究は、(1)人間は筋肉などの器官をどう動かして音声を発するのか、(2)発せられた音声は空気中で物理的にどういう状態であるのか、(3)空気中を伝わってきた音声を人間はどのように知覚するのか、という三つの観点から行う必要があることがわかる。この三つの観点から見た音声の研究を、それぞれ調音音声学、音響音声学、聴覚音声学と呼ぶ。

調音音声学 話者を中心に考え、人が音をどのように作るかという観点から音をとらえた生理学的な研究

音響音声学 空気中を伝わる音波の物理学的な研究

聴覚音声学 聴者を中心に考え、聞き取った音の認知や区別の心理学的な研究

音声学の基本は特定の言語に限定されない「一般音声学」であるが、扱う対象によって「日本語音声学」、アプローチの仕方によって「実験音声学」「心理音声学」などの分類がされることもある。この本が扱っているのは「一般音声学」的観点での「調音音声学」を基本とした「日本語音声学」ということになる。

第2節 音声

音声とは人間が意識的に音声器官を使い、伝達目的をもって発するオトである。私たちの生活の中には「オト」が溢れている。自然の中で感じる風の音、犬の鳴き声、バスの発進音、携帯の呼出音などであるが、これらを音声などとは呼んでいない。また、次のような「オト」も音声とは言わない。

拍手、くしゃみ、咳払い、寝言^{ねごと}、鼻歌^{はなうた}、口笛^{くちびす}

まず「ことば」として使われ、情報を伝えるということであるが、拍手、咳払いなどは確かに情報を伝えているが、拍手は手を使っているので、音声とは言わない。音声は(人間の)「くち」から出なければならないのである。それなら、くしゃみも寝言も鼻歌も「くち」から出ているのではと思われるかもしれないが、情報伝達の有無ということと、もう一つ、意識性という点がない。くしゃみも寝言も鼻歌も、出している本人は意識的に発しているわけではないはずである。「ことば」として使われるためには、使う人が使いたい時に自由に使えるものでなければならないからである。

音声は言語音(または単に音(おん))とも呼ばれ、咳払いや口笛などとは異なった分類がされている。音声は研究対象としてさまざまな分析が行なわれてきているが、咳払いや口笛などが音声として研究されていることはほとんどない。

第3節 音声器官

音声を発するに当たって、その音声を形づくるのに関与するすべての器官を音声器官という。すなわち、鼻、鼻腔(鼻むろ)、唇、口腔(口むろ)、齒、齒茎、舌、口蓋(硬口蓋と軟口蓋とに分ける。)、咽喉頭、喉頭、声帯、気管、気管支、肺臓などは、すべて音声器官である。具体的に言えば、声帯を出た呼気は通り道(声道)を通して、口や鼻から出てくる。このときまざまな音を作り出すのに、声道の各部分が使われている。声道の上の部分(上顎など)には動く部分はほとんどなく、声道の下部分(舌など)が積極的に上の部分に近づいたり、触れたりして調音を行なっている。積極的に動く下の部分を調音体という。調音者と呼ぶこともある。

口の上の部分、齒茎からノドチンコの前までを口蓋という。この口蓋の前半分、つまり、齒茎のすぐ後ろから口の中程までの骨のある硬い部分を硬口蓋といい、後ろ半分の骨がなく、柔らかい部分を軟口蓋という。齒茎も前半分と後ろ半分に分かれ、後ろ半分は後部齒茎、あるいは硬口蓋齒茎と呼ばれる。硬口蓋も前と後ろに二分され、前側を齒茎硬口蓋といい、後ろ側が硬口蓋である。

口の上の部分で動かせる数少ない部分は口蓋帆である。こ

— 4 —

の口蓋帆の下にぶら下がっているのか、一般的にノトチンコと呼ばれている、口蓋垂^{すい}である。

声道の下部分(調音体)の名称は以下の通りである。

舌の最先端を舌尖^{せつせん}、その後ろの舌の細くなっているところを舌端^{せつたん}という。この二つを合わせて簡略に舌尖^{しんさき}ということもある。舌端から舌の根っこ(舌根^{せつこん})までの間を二つに分け、硬口蓋の下辺りの前側を前舌^{まへした}、後ろ側を後舌^{あとした}と呼ぶ。前舌と後舌の間^{なかしな}に中舌という部分を入れることもある。

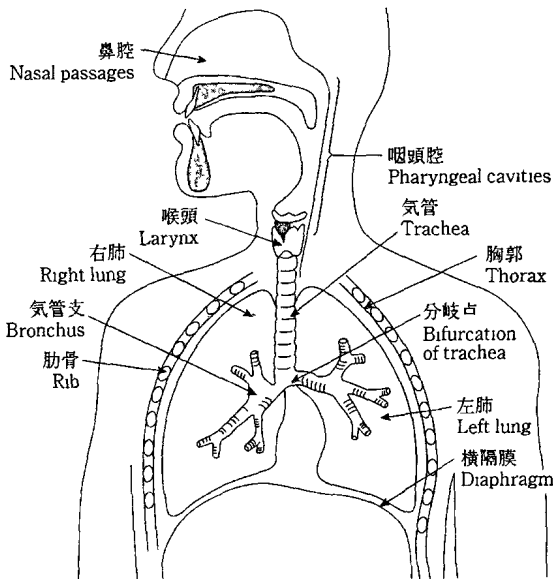
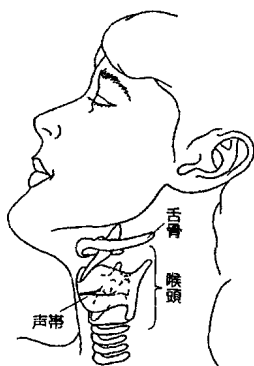


図1 音声器官の全体図

第4節 言語音を作る仕組み

いろいろな情報を持った音声は、どのような仕組みで作り出されているのだろうか。音声を作り出すことを音声の生成という。最終的には日本語なら日本語、中国語なら中国語、英語なら英語で使われる音声を作り出さなければならないが、人間には音声を作り出すための器官はない。

さて、「ことば」として用いられる「オト」、つまり音声か生成されるためには、どの言語であれ「気流」「発声」「調音」という三つの要素かなければならない。



杉藤美代子監修 (1997)『アクセント イントネーション リズムとポーズ』三省堂

図2-1 喉頭の位置

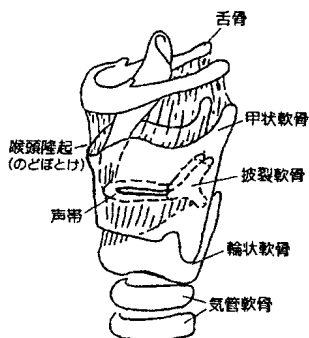
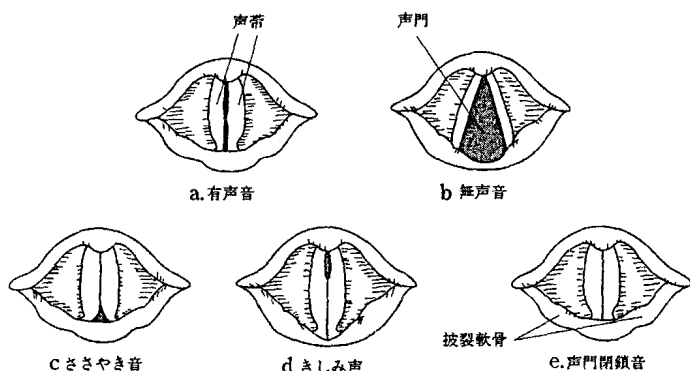


図2-2 喉頭の構成



竹林滋 (1996)『英語音声学』研究社

図3 声門の状態

4.1 気流(air stream)

発音することは縦笛を吹くのによく似ている。まずは息を吹き込まなければならない。笛を吹く時には、たいていは肺から空気を吐いて息を出す。この息を肺からの呼気と呼ぶ。

空気の流れを作り出すことを気流の起こしという。日本語ではほとんどすべての言語音を肺からの呼気を使って作っている。言語によっては吸い込む息(吸気^{きゅうき})で作る音を使う言語や、肺を動かさずに、口の中に溜まっている空気だけを使って作る音を言語音として使う言語もある。

さて、縦笛は息を吹き込むと、その息が管を通して下の穴から出て行く。笛にはピーという基本的な音を作る部分と、管に穴が開けてあって、指で抑えて基本的な音を調節していろいろな音

を作る部分とかある。(図4)

人間の場合には、基本的な音を作る部分か喉頭の中の声帯と呼ばれるところで、ちょうど喉仏の裏にある。声帯で作られた基本的な音は口の中(口腔)や鼻(鼻腔)で調節され、いろいろな音声となって出ていく。口腔と鼻腔か縦笛でいえば、指で押さえる、穴のたくさん開いた、音を調節して作る(調音する)部分に当たる。

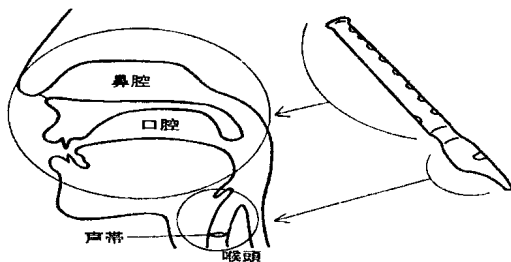


図4

4.2 発声(phonation)

気流の起こしによって作られた呼気は、まず声帯によって加工される。この加工のことを発声という。この声帯のあるあたりは喉頭と呼ばれている。声帯は左右一対の筋肉の塊で、この声帯の間の隙間を声門という。この声門の状態によって異なる発声になる。

例えば、口を大きく開けて、息を出すと、ハーと息だけが出て
— 8 —

きたり、アーという声が出てきたりする。喉仏に手をあてて、ハーと息を吐き出してみると、手には何も感じない。この時、声帯同士が離れていて、声門が大きく開き、その間を呼気がスーッと通り抜けている。

アーと声を出してみると、手にはブルブルと振動が伝わってくる。これは声帯同士が緩く閉じていて、呼気がその間を通り抜ける時に声帯を震わせているからである。このブルブルする振動のオトを^{こゑ}声と呼ぶ。先ほどのハーと息を出した時には声が出ていなかったということになる。

このように言語音には声帯の振動、つまり声を伴う音と伴わない音がある。声を伴う音は「声がある」ので有声音、声を伴わない音は「声が無い」ので無声音と呼ぶ。

4.3 調音(articulation)

声帯から上の呼気の通路を声道という。舌や唇を動かしたり、鼻腔を使ったり、鼻腔を使わなかったりすることで、声道の形はさまざまに変化する。この変化は発声という加工を加えられた呼気に加えることによって、さまざまな音を作ることができる。こうした加工を調音という。

呼気の通り道は大きく3種類に分けられる。喉頭を出た呼気は^{いんとう}咽頭へ入る。咽頭とは口の中を覗いた時に見えるノドチンコを含む、その後ろあたりをいう(図5.1、5.2)。